

昭和二十年十一月

戦後の日本工芸

商工省 工芸指導所

工芸日本の顯示

齋藤 信治

新日本建設の理想が、平和的・文化的國家を再建し、世界文化の進運に寄與せんとする所にあることは、畏くも終戦の御詔書に昭示せさせ給ひし所であり、又首相の宮殿下が施政の根本方針として屢々御聲明遊ばされた所であるが、是は又、ポツダム宣言實施上、當然の行き方であると云はなければならぬ。

此の大方針を實現する上に於て、今後我國工業生産の指向は、當然重工業より、輕工業へ、大工業より中小工業へ、原料工業より加工々業へ、粗製品工業より精工品工業へと、より高度の科學技術と藝術文化の攝取に進められるであらうことは、何人も豫想する所である。

斯かる豫想の下に、吾國工芸産業の振興は今後大に助長せらるべく、之に依り内に在りては國民の生活文化は益々向上し、外に於いては世界貿易市場に安全、且つ有利な位置を占め、自ら世界の文運に寄興し得られることになるのである。

由來吾國工芸は藝術文化の面から見ても亦産業經濟の立場から見ても、特殊の地歩を占むるものであつて、中古以來、歴朝よく之が保護獎勵を致し、亦封建時代に於いて、各藩競ふて助長振興の方策を實施し、爲に歐米各國の間に大に其の價値を認めらるゝに至つた。又明治以後に於ては吾國文化の海外宣揚と輸出貿易振興の爲め、特に之が産業上に於ける進歩發達を企圖し、意匠並に製造技術の改善進歩を促す目的を以て、政府は歐米先進國に實業練習生、又は調査員を派遣し、國內に於いては毎年工芸展覽會を開催し、或は工芸に關する教育を盛んにし、官立研究指導機關を設立し、又民間團體の活動を助成する等、種々の施策が行はれた。又藝術文化の向上發展の面からは、文展に第四部（工藝部）が追加せられたことも周知の通りである。

即ち即ち吾國に於いては工芸の保護振興といふことは古來文化及産業上の國是として堅持せられた一貫せる方策であつて、之を國情民風の上より見るも亦、

戦後の日本工芸

工芸日本の顯示	齋藤 信治
科學技術と工芸	大河内正敏
農村工芸の振興	有馬 頼寧
日本工芸の今後の行き方	藤山愛一郎
主として輸出工藝品に就いて	兒玉 希望
工藝界への要望	伊原宇三郎
本當のもの — 美術工藝偶感	谷川 徹三
工芸の郷土性に就いて	高村 豊周
對外貿易の諸問題	石澤 豊
創造力の源泉に就いて	宮本百合子

吾國運の對外的伸張といふ見地よりするも、當然且つ必然の方策と云ふべきである。

然るに最近国防上の必要から、吾國産業の指向が重工業の急速なる確立に向けられ、長き傳統と幾多の特點を有して居った中小工業は、種々整理統合をせられ、或は轉廢を餘儀なくせられて、爲に工藝産業は殆ど昔日の面影を没せんとするに至った。

此の秋、突如として終戦の御聖断が下り、事態は正に一變した。此の新しき事態に處して國家再建の方圖を確立し、祖先の遺跡をよく後世に継ぐことこそは、敗戦を喫した吾等のせめても果たすべき責務であつて、之が爲には敗戦の原因に鑑み、永き國家民族の將來を考へ、文化及經濟政策の一大轉換を斷行すべきであり、而して其の政策は古來吾國の踏襲し來たれる「工藝日本の顯示」といふ一貫した方針を再認識して此の傳統上に立脚し、而も今後愈々發達すべき科學技術の攝取に依り、世界の檜舞臺に登つて恥かしからぬ新日本の文化宣揚と産業の確立に目標を置き、誠實と勇氣を以て之が實現に努力せねばならぬものと思ふ。

斯る見地から私は工藝産業の振興に關し、各方面の關心と活潑なる施策の實施を要望するものであるが、以下此の問題に關し、當面の問題と基本的な問題とに別けて若干の私見を述べ、大方の是正を乞はんとす。

當面の諸問題

一、國民生活の再建

長期に亘る戦争、殊に苛烈な空襲によつて國民生活は著しく損傷し、且つ低下した。戦後復興の第一要件は先づ衣、食、住、全面に亘る國民生活の急速な回復にあることは無論であるが、更に進んで文化日本として更正すべき日本國家の將來を考へる時、國民の精神生活と物質生活の両面に亘り、より高度の新しい國民生活様式の確立こそは、今日最も必要な問題であり、又今日が絶好の機會である。

工藝の立場から吾々は、今次の戦争による貴重な多くの體驗を資料とし、

(イ) 新生活様式の確立 (ロ) 新生活様式に基く生活用具の生産

此の二つの問題の解決に就き、具體的な計畫と技術を以つて參照せねばならぬ。而して生活様式の問題は、現實的には今後計畫實施せらるべき戦災諸都市の復興に於て、都市の構成、建築の様式、材料と技術等に關係を持ち、生活用具の生産は更に又、軍需工業より民需工業に轉換する中小工業の進み方に至大の關係を持つことを念慮すべきであるが、生活様式の確立に對する基準、並に之が裏付けとなるべき生活用具の持つ諸条件としては、次の諸點を擧げる事が出来ると思ふ。

- 1 吾國傳統の家族制度の特質を失ふことなく、然も國際性を有せしむること。
 - 2 生活の科學化、能率化を圖ること。
 - 3 生活の道徳性と藝術性を高めること。
 - 4 國民に國家再建の希望と勇氣を興ふべき明朗性と堅實性を有せしむること。
- 今後生活の問題こそは、政治、經濟、文化、あらゆる方面の總力を擧げて、之が改善に努力すべきものと信ずるが、吾が工藝指導所は差し當たり、軍需工業から民需工業へ轉換すべき中小工場の設備及技術を活用し、生産と消費の両面より検討した「復興型」とも稱すべき極々小數の規格製品を設計試作し、之を世に提示して批判を仰ぎ、遂次改良を施し、此の方式による生活用具の普及を企圖して居る。

二、轉換工場の技術指導

戦争終結に伴ひ、軍需産業より民需産業、の轉換は、急速且つ圓滑に行はなければならぬ。而して轉換の方向としては、國民生活の確保に必要な衣食住關係の生産事業、輸送、通信等の復舊に要する各種需品の生産、其の他土木建築等、戦後復興事業に不可欠の事業、更に賠償物資及輸出品の生産方面にも振り向けらるべきものと思ふ。

之等轉換工場の中には、從來木材製品、金屬製品、漆器及塗工品、染織製品、陶磁器、皮革及紙製品等、各種工藝品の生産工場にして、航空機工業乃至は各

種軍需品工業の協力工場、又は下請工場として操業して居たものも多数あり、之等は各々従前の手馴れた仕事に復舊せんことを希ふであらうし、また全々新に軍需工業より、家具、什器、其他生活必需品關係製品の生産事業に轉換せんと計劃して居た向も尠くないと思ふが、何れにしても單に戦前に於ける工芸産業に復原するのでは意味がない。

時代は確かに一回轉したのであるから、それだけの進歩がなければならぬ。即ち尠くとも軍需生産に於て折角習得した流れ作業式規格生産方式、材料處理及加工上に於ける新しい科學技術、製品の精度及性能検査、原價計算方式、其他經營上の新方式等の長所は之を充分生かす様に心掛けねばならぬと思ふ。そして更に工員の一人々々に自己の魂と技術を製品に打込まねばおかぬ藝術的良心を發揮せしめ、優良品の經濟的生産を可能ならしめる様適切な技術指導が行はれることに依つて、より高度の科學性と藝術性を持つ新しい時代の工芸品を創り出す戦後の工芸産業が生れて來ることを念願するものである。

吾が指導所は常に民間工場および旅伴として、又道案内者たらん事を期し、一方に於ては目下紹會文書と現場調査とを併行して、轉換工場の實狀を把握する事に勉めて居る。そして他方に於ては國民生活用具の規格設計及土產品の意匠等の研究を進め之等轉換工場へ資料を提供し、進んで工場の現場指導をなし、又戦時中休止して居た工芸に關する傳習事業を復活して、今後需要の増大を豫想せられる工芸技術者及工員の養成を企圖して居る。

三、進駐軍及觀光客人の土產品の生産

長い戦場生活より直接本土に進駐して來た亜米利加の將兵が、異國に對する好奇心と、歸心矢の如き彼等の故國への土產品として、豫て噂に聞いて居た日本の美術品や工藝品への慾求が如何に強いものであるかは、吾等の想像を遙かに超えたものがある。然るに、東京を始め進駐軍の上陸して來た大小諸都市のマーケットには、彼等の慾求を満足せしむるに足る商品は殆ど無いばかりでなく、生産が殆ど停止、若しくは廢滅に歸せんとして居る。此處に於て土產品工藝の急速なる生産が遽に當面の問題として擡頭して來た。進駐軍に對する土

產品の生産は、やがて來るべき賠償物資及輸出品の生産に直結するものとして、極めて重要な意義を持つものである。又工芸産業復興の魁として起ち上りを一層急速ならしめる手段としても、非常に魅力がある問題である。今回商工省に於いて進駐軍に對する土產品の生産を急速に達成する爲、差當り日本雜貨交易統制會社、中央及地方纖維統制會並に日本美術及工芸統制協會の三團體を集荷機關に指定し、土產品の生産、集荷並に販賣等の業務を取扱はせ、工藝指導所、纖維工業試験所及美統をして之が生産技術の指導を擔任せしむることに決定した。單なる記念的な意義を持つ土產品と、本格的な輸出品或は賠償物資とは自ら條件の異なるものがあることは無論であるが、飽くまで日本的な内容と表現を正しく、誇張すること無く、持つものを生産し提供すべきである。特別に阿諛迎合せる所謂濱物式俗悪品や、まやかしもの、骨董品などは嚴に排折すべきである。日本の文化及産業を正しく紹介し、やがて之が將來の輸出品のサンプルになるやうに心掛く可きであると思つて居る。

猶、此の機會に内地の名所舊跡に於けるお土產品も是非舊來の低俗粗惡さを一掃するやう、適當な措置が講ぜられんことを提案する。

四、工芸産業の國土計劃

吾國の工芸産業は舊藩時代に於て各々特徴を以て全國に分布傳承し、次第に發達し、自ら定つた生産分野があつた。然るに近年は都市に各種の工藝生産が集中し、地方に於ける工藝は次第に衰微し、又は滅亡せんとする傾向があつたが、長期の戦争により工藝技術者は、或は召されて戰場に、或は軍需工場に馳せ參じ、然らざるものは多くは地方に疎開をし、其の生産設備は戦火によりて失はれ、爲に都市に於ける工藝の生産は殆ど潰滅の状態にある。

終戦と共に中小工業の復活、特に工藝産業の急速な復興が期待されて居る時、再び工藝産業の都市集中を自由に放任せられてよいか何うか、私は何うしても都市の復興計畫と共に、當然之等中小工業生産の國土計劃が樹立せらるべきであると思ふ。

而して文化度高き新日本建設の大理想達成の爲には、文化施設の中央集權的

弊を排除し、地方文化の普遍的發達を企圖する立前から文化的生産事業である工藝産業の如きは、飽く迄地方分散の形に於て充分之が發達を助長すべきであると思ふ。

幸に最近都市に於ける工場が地方に疎開をし、或は地方に協力工場、下請工場を設定し多數の技術者は多く地方に生活して居る。又權威ある藝術家、技術者にして地方に疎開して居るものも尠くはない。是等の人と物とを、再び無計畫に自由に都市に復歸せしむる事なく地方に其の儘殘留せしめ、之を活用することに依つて地方に於ける工藝産業の振興を計劃することは極めて意義深いことではあるまいか。是には後に述べる學校、圖書館、美術館等の地方分散が當然實現せられなければならぬ。

之を要するに工藝産業は文化と經濟の二つの礎石の上に打ち立てられる建築であるから、工業立地の經濟面からと、地方文化の向上といふ面からと、充分検討して適切な國土計劃的振興策が樹てられるべきであると思ふ。

基本的な諸問題

一、工藝行政の確立

工藝行政は國民の實生活の面に於ては社會政策的見地から、又國家の産業經濟の上からは産業政策的見地から計劃實施せられる事項であると思ふが、私の考へを持つてすれば、實施は各單獨に於てせられても、是等は総合的に立案計劃せられるべきものと信じる。

然るに我が國の現状は此の理想と相隔たること甚だ遠いものがある。工藝行政に於て厚生、文部、商工三省に於ける有機的連絡など聞かぬ。恐らく一省の間に於ても各部署の緊密なる連絡調整は困難ではあるまいか。到底吾人が夢見る工藝行政の一元化などは机上の空論でしかないとされるであらう。

極く最近の出來事を例にとつて見ても、日本美術及工藝統制協會の創立に當つても商工、文部兩者及情報局三者の間に於て果して完全な政策の一致があつたであらうか。決戦下技術文化の保持向上といふ最も重要な問題が常に資材及價格行政の面からのみ働いて、大切な文化政策の影が極めて薄弱であつた事か

ら見ても此の事が窺へると思ふ。

一體に戦時下に於ける諸統制は劍と物質的統制力が強く、文化政策が非常に無力であつた事は事實であるが、文化日本の建設の爲には此の弊は大に改めらるべきであると共に、各省、各局に於けるセクシヨナリズムの是正を特に要望し度い。

日本美術及工藝統制協會は今回日本美術工藝會として新發足するに當り、特に此の問題を採りあげ各省、各部署間を斡旋し、我國工藝行政の一元化の實を擧げるやう適切な働きをして頂き度いものと思ふ。

二、工藝研究指導機關

國立の研究指導機關としては商工省所屬の陶磁器試験所、工藝指導所及纖維工業試験所の三つがあり、別に文部省美術研究所があり、厚生省に厚生科學研究所があるが、此等二つの機關に於て工藝文化の研究と指導に何程の施設があるかはよく判らぬ。其の他工藝専門の美術館、博物館など國立のものも公立のものも皆無である。何れにしても「工藝日本」の爲に餘りにも貧弱な政府の施設を悲しむものである。

文化日本の建設を理想とする新日本建設の設計中には生活文化及藝術文化並に産業文化の向上の爲に、完備した美術及工藝博物館、研究所並に教育機關の設置を忘れないやうにせねばならぬ。而して此の博物館と、研究所と、教育指導機關は三者不可分のものであつて、今後の都市計劃の中には、此の三つのものゝ爲に適當な場所に大いなるスペースが豫定せられなければならない。そして各地方に設立するべき之等博物館、研究所及教育機關は、各々特色あるものであり度い、此の點歐洲各國の施設は學ぶべきものがある。次に工藝に關する研究機關の經營の問題であるが、私は自己の經驗から半官半民乃至公益法人の經營を可とする意見を持つてゐる。特殊の人材と多額の費用を要する此の種機關が、官制及び少額の豫算に制約せられるやうでは到底立派な仕事は出來ない。理想的な形態は公益法人の經營を國家が補助し、非常に優れた統率者のもとに多數の俊髦を集めて、思ひ切つた研究をやらせる事が一層効果的だ

と思つて居る。

斯る見地から此の際日本に於ける財閥に、戦後に於ける我國文化及産業の發達に貢獻する意味に於て財團を設定し、工藝に關する研究教育機關を經營することを勧め度いと思ふ。

三、工藝文化の海外宣傳と工藝商品の輸出

武力に依る國威の宣揚は悲しむべき結果を齎した。日支事變直後、倫敦に於て正金支店長加納子爵が日支兩國の對英文化宣傳の巧拙に關し、話されたことを今更の如く懐ひ出し、他國民に正しい理解と同情を得る手段として、美術品及工藝品展示の如く直接目を通し、相手の感情に訴へる文化宣傳の偉大なる効果について、餘りにも我國は無策であつたことを悲しむものである。此の問題にしても、文部、商工、外務、運輸各省の行政に關聯を持つたものであるが、對外宣傳は平和の戰爭であるから、總力を發揮して思ひ切つてやるべきである。工藝商品の輸出問題に關しては、餘りに言はれ過ぎた事項であり、又私自身も今迄色々の機會に述べて居るが、畏くも高松宮殿下のご聲明として、新聞に發表せられて居る所を拜讀すれば、今後吾國の輸出品は從來の安かろう悪からう主義を一擲して、優良品主義で行かねばならぬと仰せられて居る。

輸出商品は無言の外交官であり、宣傳隊である。特に工藝品の場合は吾國の藝術文化と技術水準を示すものであり、更に産業道徳をも示すものと云ふて良い。此の意味に於て充分に日本の實力を示すに足るものを輸出すべきであり、之が爲には國營の權威ある輸出品検査施設の設置を要望するものである。

科學技術と工藝

大河内正敏

日本工藝の今後の在り方に就て

日本の今後の工藝は非常に難しい問題で樂觀を許さないものと思ふ。それは日本の工藝が世界で賞美され認められて居るのは現代の工藝に非ずして昔の工藝である。例えば蒔繪にしても陶器にしても佛像のやうなものにしても結局認められて居るのは昔の工藝である。昔の工藝は寧ろ一種の美術品である。これの貴いのは何であるかといへば品數の少いと云ふことである。數が多いものは價値が無いと云ふことになる。それで新しい工藝はどうであるかと云へば數の少いものでは工藝として成立たない。世界に出すと云つても數が少くは出ることが出来ない。然も現代の工藝は何處迄外國人の嗜好に投ずるか云う問題になると結局向ふの趣味に應じたものを作つて行かなければならぬ。それは我々から考へれば頗る不本意な俗惡の趣味のものをも採り入れて行かなければ輸出品として成立たないことになる。故に今度は本當の日本の工藝の趣味を理解させる上からは向ふから先に教育して行かなければならぬ。これでは今後の工藝と云ふものは難しいものであつて、寧ろ工藝に非ずして大量生産の工業に移つて行かなければならぬ。さうすれば生きる路が出て来る。その代わり所謂具眼の士が見れば如何にも俗惡のもので自己の趣味を没却して作つて行かなければならぬ。又工藝として美術品として後世に遺さうと云ふのは小數のものを作つて行つて内地の具眼の士の要求に應じて行くと云ふ式で行かなければならぬ。

この二つの極端の方面に走るだらうと思ふ。従つて外國に對する日本の工藝の位置は下級の方に屬すると思ふ。これでは迎も日本の高級の趣味を向ふへ知らせることは思ひも寄らぬと思ふ。それには昔のカップーで行くより外に仕方がない。さうすると工藝の要求する所は自己を出してはいかぬ。昔の通りのものを模寫ばかりやることになる。これは工藝家としても耐えられないことだと

思ふ。例えば進駐軍が来て版畫を買つて行つても古い版畫は買はないで、古い版畫の模寫の版畫である。今日の新時代の版畫と云ふものは殆ど買はない。我々が面白いと思ふやうなものは先生方の趣味に合はない。外國人の趣味は我々とは非常な違ひである。それで向ふの工藝品は向ふの趣味で出来て居る譯であるから向ふの趣味とそっくり合ふやうなものを作つて行けば宜い。日本式の工藝であつては駄目だと思ふ。向ふからこう云ふものを作つて呉れと云つて来た時に向ふで作るよりも安くて悪くないものが出来なければ工藝としては伸びない。つまりそれは工藝に非ずして工業である。アップライトアートでなくしてインダストリーになる。例へば日本の漆器のやうなものは向ふの趣味に合ふやうな生活必需品と云ふか、或は室内の家具等にこれを應用して行くと云ふ事が考へられる。然しそれは飽迄も向ふの趣味でなければならぬ。

この爲には中小工業でなければ日本式の工業は成立たない。詰り良くて安いもの、これは中小工業でなければ出来ないと云ふ信念を私は多年の體驗で持つて居る。故に對象物としては例へば工藝でも數の餘計出るものでなければならぬ。數の餘計出るものを中小工業でやらなければいかぬと云ふ説である。

科學技術と工藝品の問題

科學技術を工藝品に應用すればそれは藝術の墮落であり、藝術の逃避である。廉いものを多量に作るには科學と技術で行かなければならぬ。それは藝術に對する冒瀆である。と云ふのは甲の工場で拵へても、乙の工場で拵へても、同じ物を同じ様に拵へて、然も生産費を廉く拵へて行くといふやり方には必要である。それと同様に技術に藝術を加味する事は建築とか建設、造船等の或る場合を除いては宜しくない。即ち多量生産には有害である。

日本の工藝の民衆化

今の日本人に對する工藝品は今迄のやり方で宜しいと思ふ。所謂名人氣質と云ふものが工藝の上にも現れてアップライトアーツで發達して行く。これは世界的のものでない。日本人の現代趣味を外國人に知らせるよりは、寧ろ外國趣味が日本人に入り込んで來てゐると見る方が良いと思はれる。だから世界的な

ものを知るには矢張り商賣の方から來なければならぬ。向ふから見本が來て、その見本に合ふやうなものを良く安く多量に作つて行くといふ事が必要だ。それはインダストリーであるから、向ふの技術を學ぶ必要はない。何處を學ぶかといへば、大量生産の科學技術を學ぶのである。現に戦前ナイフとか、フォーク等の食器類の見本がオランダから越後の三條、燕邊へ來て、それを以て直接オランダに輸出した。或は萬年筆、煙草のライター、陶器等皆向ふから見本が來て、それを作つて輸出してゐた。

これ等の製品には注文者のマークが入つて日本のマークがないから無論日本の趣味を加へてない。日本と云ふものは抹殺されてゐた。日本の趣味の抹殺されないものは、先に言つた高級工藝といふことになる。それで將來賠償物資として工藝が輸出されるといふのも大部分がさういう所謂工業になる譯である。工藝といふものは大量生産をやつては墮落して仕舞ふ。個人々々の個性、作者の人格が作品の上に現はれるものが工藝であるから、大量生産では工藝は成り立たない。

生産の國土計畫性に就て

これは大都會でやつては駄目である。地方々々に應じてやつて行かねばならぬ。高級工藝は別であるが、インダストリーとなれば、此處には斯う云ふ原料があつて、これで何を作れば宜い、燃料はどうするとか色々立地条件を考へて良い所に持つて行く。さうしてそれは甲であつても乙であつても同じものを大量に纏めて大量になる様にしなければならぬ。

日本の製品の過去に於ける安物との非難に對する對策

日本製品が過去に於て安物であつたと云ふのは、物が悪いからであつた。所謂粗製濫造になつたから聲價を落す譯である。それで將來再びこれを繰返さない方法としては検査に依るより仕方がない。又註文をするのにも注文を公開して行かなければならぬ。今迄は輸出商が拔駈けの功名で買入れ價格を廉くすることのみを祕密主義で行つたから、生産は凡て祕密主義で行はれた。一時的の利潤のみを考へて永久の利益を考へなかつた。これではいけない。勢い粗製濫

造とならざるを得ない。元來、大量に物を作ろうと云ふ時には一定の生産方法があつて、それ以外に出ては餘計出来ない。粗製では大量にならない。本當の大量生産といふものは粗製濫造とは生産方法が丸で違つて居る。此處でも作り、あそこでも作り、何人が作つても同じ物が出来るといふ爲には、特殊の設備を持たしてやらなければならない譯である。特殊な設備でやるのだから何處でやつても、何人にやらせても同じ物が出来る譯である。其處に大量に出来て行き、粗製にならない原因がある。この爲には小工場で飽迄も分業的にやつて行くことが必要である。これは今迄の家内工業に還ることになるが、今迄の様な加工方法をなく、最新式、新考案の加工機械設備をもつて小人数で一工程だけの加工をやる。次の工程は又次の小人数の組でやると云ふ風に分業にする。だから其處には個性が没却される。勘の働く餘地を皆無にするのである。

科學技術の將來に就て

科學技術者の養成等も現在と同じやり方で宜いと思ふ。たゞ今迄の日本の科學技術の中で一番不足して居つたのは、大量生産の科學技術であつた。大量生産は大工場で行ふに非ずして、小さな工場に分業的にやらして、全體を大量に作る。これは丁度、飛行機の部品を作らしたと同じ式が良い。

然しそれには今迄のたゞ小さい工場で小人数でやつて居つたといふだけでは駄目で、何でも出来る機械を使つてやつて居つたから本當の大量生産にならなかつた。大量生産をやるには特殊な機械を考へて中小工業に使はせることを考へなければならぬ。

統制に就て

どの面でも従來の様な官僚統制では駄目である。どうしても自由經濟にして置いて、使ふ材料は同じといふことの統制で行かなければならぬ。然し爰にも亦、種々な弊害が生れて来るが、未だゞ官僚統制よりも遙かに良い。配給を官僚の統制で行くと、業界のことが丸で判らない人達が一、二の業者から聞いて配給する爲に、適材適所主義に行はれず、大きな業者のみが多く配給を受けることになり易い。勿論、民間の業者間の統制に委すと、統制權を持つて居る

理事者等が比較的有利な立場に立つて、小さな業者は如何に良い物を造り得るものでも、不利な立場に立つと云ふことが往々起つて来る。何れにしても、難しい問題である(談)

農村と工藝

有馬頼寧

終戦後新しい仕事に轉換するまでの應急製品として、最近種々な農器具や食器が作られ、巷に眺められるがこんなことをしてゐるのみでは直に行き詰つて仕舞う。

農具を通して農業の形態が變つてゆく、食器も同じく器に依つて食生活が變換せられてゆく、と云ふ處まで行く可きだと思ふ。飯櫃その他味噌汁等の如きものゝ容器も、今後は結局魔法瓶の如き系統にしたいものである。之は一例であるが、各種の利點を考慮すると斯様な點に着眼せねば詰らぬと思ふ。農具も食器も新しいと云ふだけでなく進歩が望ましい。

日本の農具は妙な言ひ廻しではあるが、今迄閑な時に使はれるものが多い。勞力が不平均であつて、農繁期に於ける田植機械などが無く、繩ない機械などに相當のものが出て居る。元來繩をなふのは冬期とか夜間とかの有閑時に行はれるので、忙しい時の勞力を助けては居らない。之からは最も忙しい時の農具に優秀なものが出現しなければならぬと思ふ。鋤き起こすことなど相當な勞力であるが、精々牛馬を使用するに止まつて居る。外國の機械等は我國の如き水田では重量の點からも不適當であり、日本の水田に使用して効果を上げ得る如きものでなければならぬ。

三十年位前であつた。獨逸で斯様な式のものがあった。それは畦から畦にワイヤーが張られ、畦でワイヤーを曳くと鋤だけがワイヤーを傳つて往復する。

これなら重量もかゝらぬ。日本には此の様なものが要るのではないかと考へる。日本の水田は皆狭小に過ぎる、もつと機械力に相應しい廣さが必要である。要するに田の中に入らず操作する機械が日本では必要とされる。

今まで農民の餘閑に作られてゐた所謂民藝品は住宅とか農耕のやり方、機構、環境等から総合されて發達して來たものであり、古い歴史がある。傳統を無視して單に便利の爲にのみ變へるのは必ずしも良いとは言へぬが、藝術的見地からのみ觀ての古物を残すのは考へものである。結局從來の良さを残しつつ、改めて行くのがよいのであつて、趣味と云ふ點にこだはり過ぎて、外部から眺めてゐると云ふ感もある。

戦時中の話であるが、大阪の島野技師の書いたものに、地方へ工場を疎開した時、工場と云ふ型に捉はれて、地方へ出て工場らしい建物を造り上げる。

これではいけない納屋なら納屋、蠶室なら蠶室を其の儘に使用し、動力も電氣が無ければ水車でもよいではないか、そして部落から部落への流れ作業も亦、採るべきではないかと云つて居られたが、結構であると考へる。

工藝と云ふものは斯様に進んで行けると思ふ、之からの農村は農業をやる者は工藝もやる。並立して國運を助長して行くと言つた形になつて行くのが、よいのではないか。何處の國に於ても、その特性を維持せねば、其の生命は失はれる。日本の如き立場にある國では、日本品の持つ特色を充分に發揮したものを出して行くべきで、例えば生絲の場合、米國のナイロンが如何に發達したかからと云つて、日本がナイロンを模倣したのでは駄目である。日本ではやはり日本の良さを發揮した生絲を出して行く可きである。

日本の特色である簡素美、これは外人も確つきり認めて居る。茶の湯の美、茶道の深さ、を外國人も尊敬する。此の點を常に念頭に置く可きである。

日本の陶器もやり様に依つては、世界中の覇者となり得ると思ふと述べたことがあつたが、此の問題も日本独自の良さを發揮出来るか否かにかゝつて居ると考へる。

現在日本に於て工藝が與へられて居る位置に就いてゝあるが、文展の各部の

出品物を見ると、外人から眺めた時工藝が一番問題となり得る。日本畫も断然とまでは行かぬ。洋畫は勿論彼地のものであり、彫刻も力が足りない、其の點工藝が一番日本を代表して居ると云へるであらう。然るに工藝の與へられて居る位置は稍々低きに過ぎる感がある。

今後工藝は何處へゆく、政府が如何に變つて行つても工藝が飛躍的に伸びると思へぬ、むしろ今は御皇室に頼つて行くのがよいのではないか、皇室は政治とは段々に遠ざかつて行く傾向が觀取せられる。皇室は今は藝術の面に力を注がれるのが最上の途と思考されるが、私は皇室の御仕事のひとつとして藝術面を擔當せられるのがよいと斷定する。その運動等の可能性はあると思つてゐる。

曾て歐洲大戰當時、それ迄佛蘭西から良い陶器が輸出せられてゐたが、大戰中に其の職人が出征してしまつて中絶したことがある。休戦となり政府はこの復興を希望したが遂に成功せず、佛蘭西としての大きな輸出が駄目になつた事がある。即ち良い技術を持った者は何等かの形で保護を加へなければ大きい損失を招來してしまふ。其の點から云つても、帝室技藝院の如きもので皇室に依つて保護されなければならぬ。將來の工藝は我が國に於ては、日本の特徴をよく現はしたものを以て各國と競争して行くのがよいのである。

又日本人の優秀な點として斯様な話もある。

カリホルニヤでは苺の栽培が盛んである。そして其の栽培が殆んど日本人に限られてゐる。と云ふのは外人には日本人の様に躰がめない、また小さい柔らかい苺をつまむのは、大きな掌の外人には仲々難しく、結局日本人の獨り舞臺となつて居るさうである。日本人の特色が活きた一例である。

日本工藝品の良さは周圍の總べてのものとの綜合的調和に依つて最大の美を發揮する。家具との調和、自然との調和、また家屋との調和、皆實に良い。そのまゝを外國に持つて行つたならば失敗である。ポストン邊で見掛けた日本家具はやはり日本家屋を作つて納めてあつたのは點頭ける。殊更外國に迎合して色彩を濃くするとこれは又變なものとなつて仕舞ふが、日本の色は總括して澁

ぶ過ぎると思つてゐる。

日本の政治家に缺けてゐる點は藝術に對する理解力である。藝術を解しないのが政治の上に現はれて、直觀力に乏しいのは其の點にあるのではないかと思ふ。マッカーサー元帥は其の點では美の理解があるから、政治の面に良さが現はれると考へてゐる。なかには無趣味が反つて良いなどと云ふ政治家もあるがそれは間違ひである。工藝教育の問題でも、仙石さんが大臣の當時であつた。雑誌「現代」の坐談會の時、農村に都會人が入り込んで行く、其の場合純農村人になれと云つてゐるが、それは無理である。一般に都會人はレベルが高い、それをレベルの低い田舎に合致させるのはなか／＼困難である。農村文化と都會文化との溶け合つた文化で、新しい農村文化が創り出されなければならないと思ふ。最近、賀川氏が時計學校を農村に持ち込んだのは、農工の接近と云ふ點からも結構である。

農村文學は現在のまゝでゆけば飽きられて仕舞ふ。土の文學は概ね單調になり勝ちなものだ、私が出して居つた有馬賞も戰爭で一寸休んだが、農民文學はただ土の主題でなく農民藝術全體に互つてやるべきであつて、農民文學は農村人の中から油然と湧き上がつて來るものでなければならぬ。一般に農民は農村文學には餘り興味を持たない。未知の世界を述べたものに魅力を感じるのとは共通である。移民等の問題も駄目となつた現在、世界が何とか轉換し終るまでは、狭い日本内地で七千八百萬が押し合ひ、へし合ひ乍らも扶け合ひつゝ生活して行かねばならない。

未耕地の問題でも觀方に依れば北海道だけで二百萬町歩あると云ふ。斯んな案もある。日本農業株式會社を設立し、資本家の有休資本を動員してそれに復員兵を結びつける。勿論大農經營で行ふが、可能性は充分あると考へる。

日本の耕地面積は全體の十三%であるが、やり方がまづいと思ふ。やれば全收穫高を五割増すことも可能である。

マッカーサー司令部から日本の政府は打つ可き手をまだ打たず依存して來ると云はれたのは急遽を衝かれたと云はゞ云える。今後は滿腹主義を捨て、榮養

主義に移るのである。

日本では農政策と食政策を判然と區別して居らぬのは非常に工合が悪い。農林省は生産だけに専念し、消費面は内務省なりでやる方が妥當であると思ふ。農林省が各懸の任免權も有たず、如何にバタ／＼したとて無駄である。結局、斯うなつて來ると食糧省が要求されて來る。今更、機構いぢりも感服出來ないが、やはり機構の問題となつて來るのは致し方ない(談)

日本工藝の今後の行き方

藤山愛一郎

今度の新しい事態に對應して日本の産業の將來を考へると、原料も乏しく國內資源も十分でないことから、大工業は相當制約されて來ると思ふ。そこでさうした條件の下に日本の産業の將來の發達を考へ、然もそれが國際平和に寄與するやうな發展を考へるとすれば、どうしても中小工業が相當根幹をなして來るのではないかと考へられる譯であるが、そこで中小工業で一體どういふ方法を以て行くかといへば、原料の豊富な時には澤山の物を作り、安く賣つても日本の國富を増進し得るのであるが、乏しい原料から製品を作るには結局澤山の物を作る譯にはいかぬ。そこで澤山の物を作らないで外國から食糧の輸入を仰ぐとか、國民生活を豊富にして行くといふ資金を獲得しようとするれば、加工に重點を置かなければならぬ。従つて精密な加工工業を成立たせなければいかぬ。そこで所謂中小産業の技術的な面の向上といふことも非常に考へなければならぬ。その點に就いて技術の向上には政府でも民間でもあらゆる力を注いで施策を遂行して、良い精巧なものを作つて行くといふことにならうと思ふ。これは近代産業的なものを考へてさう云える譯であるが、その外に今一つ殘された分野は、所謂日本古來の固有の工藝美術的な製作品があると思ふ。これは機械力

によるといふ譯ではなく、日本の従來の手工業的な仕事になる譯であるが、これとても相當機械を使つて乏しいながらも大量生産をして行く必要がある。然しこれの一番の狙ひ點は矢張り精巧品であると私は思ふ。従つて工藝美術としては良い精巧品を作つて行くことが狙ひでなければならぬ。それには幸いにして日本には數千年の歴史を持つた立派な美術の傳統、工藝の傳統がある譯である。たゞその技術なり技法を活かして更により良い物にして行くことが非常に必要だらうと思ふ。ところが戦時中はさうした仕事が必要であるといふやうなことから、例へば金箔を打つ仕事など止めさせた。この金箔を打つ技術でも大變な技術である。戦時中に工藝美術の技術は政府としても特別な保存手段を講じたが、これはあゝいふ状態の下に於いてはなか／＼困難であつたと思ふ。況んやその僅かに保存された少數の人が指導者になつて一般的な技術的啓蒙をして立派な工藝美術品を作つて行くといふことは大變な仕事だと思ふが、これをどうしてもやらなければいかぬ。又材料に於ても外國の工藝美術にない漆とか、瀬戸物にも色々な日本古來の固有の技法なり材料もあるので、こゝにいふものを十分に活かしてやつて行かなければならぬと思ふ。さういふ意味に於て意匠を凝らすといふ點に於ては純粹の日本の良いものであれば私は必ず西洋人にアツピールするものと思ふ。ところが生半可な輸出向工藝品ではいかぬ。結局日本の傳統の本當の美術的精神を活かしたものに、西洋のファッションに直ぐ合ふやうな外國人の趣味趣向に合つた、日本人が考へた外國趣味でなくて、外國人が考へた外國趣味のものを日本に移し植えて輸出専心に行く。純粹なもの、ある意味から云へば骨重的價值もあるのである。良いものは世界中通用するから日常の家庭用具の中でも日本の美術工藝の力を活かさうとすれば、ある程度は相當思ひ切つてデザインは外國の良い所を採り入れなければならぬと思ふ。従來の様な輸出向の外國製品であつては永保ちがしない。又それでは良いものにならぬといふ風に考へる。詰り固有の工藝美術の良い所を活かして行く。それから純粹の西洋の良い所をその儘採り入れてこれを作つて行く。この二つの行き方を同時に實行して行かなければならぬと思ふ。たゞさういふものを製

作する上に於ては日本の製法をそれに採り入れることは必要な譯で、日本の漆の材料とか特殊な材料を利用して西洋人の本當の新しい趣味に合ふやうなものを作つて行くことが必要である。これが矢張り日本の産業の將來の一つの大きな對象になるのではないかといふ風に私は考へて居る。同時に日本の工藝美術で以てもう少し西洋の材料を日本的にこなす必要のあるものもあるのではないか。例へば皮革に對する日本の工藝美術の使用は極めて少ない。さういふものに對する新しい外國の仕方も總べて採り入れ、同時に日本的なデザインを盛つて行く。即ち新原料に依る日本の工藝品を活かして行くことも同時に又研究して行かなければならぬと思ふ。これは又一方では農村工藝とも一體にして行く。農村の餘剩勞力を使つてさういふ郷土藝術として成立つて居るものの隆盛を圖つて行くことも必要なことではないかと思ふ。その外に工藝美術の範圍として、椅子とかテーブルといふやうな美術といふ以外に工藝的なものが澤山あると思ふ。或は工藝的と迄行かないものもあるかも知れないが、さういふものも工藝的に考へてやつて行かなければならぬので、さういふものを盛んにするといふことは世界の輸出貿易面に於て馬鹿に出来ないものと思ふ。チェッコあたりがあゝいふ種類の製品で以て世界に相當市場を獲得して居るといふことも考へてみれば、これは賠償金の問題その他にも非常に貢獻するのではないか。又工藝美術といふものを近代産業化して電氣のモーターをつけるとかなんとかすれば小さいどころでなく、なか／＼大きな仕事になると思ふ。故にさういふ點に就ては美術家の協力も得、農村の協力も得、産業人の協力も得て本當に立派なものを作つて行けるやうにやつて行かなければならぬ。それが國の役に立ち、又日本人として傳統もあれば手先の技術技巧も器用であるしするから相當やり得る仕事であつて非常に良いのではないかと考へて居る。

過去に於ける日本商品は安物なりとの譏りを防ぐ具體的方策として、今後は原料が國內でも不便であり、外國からの輸入も制限されるといふことになれば、どうしても資材の面から餘計作れないといふことになるから、安い物を作つて居られないと思ふが、然しそれだけで放置しておく譯にいかぬので、將來こ

いふものをやるのが中小工業であるといふことを考へると、矢張り地域的な業種的組合の結成をさして組合自體が研究機關を持つ、さうしてそれが各都道府縣に丁度農事試験場があるやうに工業試験場、(私のは少し範圍が廣い工業試験場であるが、)それに今の工藝指導所といふものをその中に併置するなり或は併屬して置いて、さういふものが組合の試験場を指導して行く、又組合の試験場はさういふ所を利用して行くといふやうなことにして、組合自體が製品の向上に就て政府の工藝指導所と協力してレベルを上げて行く、組合で検査もする、技術の公開もする、技術の指導もするといふやうにやったらどうか。これは一般の工藝ばかりでなく電気、機械に關しても私はさういふ風に考へる。さういふ方法でやったら効果が擧がるのではないかと思ふ。

優良品劣悪製品の對策は今迄のやうな方法に依つて積極的に良いものを作る指導をやつて、さうして出て來たものを集めて全國的に品評會をやるとか、或は政府に於て毎年やつて居られた工藝展覽會といふやうなものをやつて、それに出したのものには特別な表彰もするし、劣悪品に對しては取締をして行くといふことも必要であらう。

次に農村工業に付て一言したい。

農村工業はどうしても盛んにして行かなければならぬが、農村に於ける餘剩勞力の分布が地方々々に依つて大變違つて居るので全國一律には必ずしも行かないと思ふけれども、然しその土地々々の情勢に應じて農村に工業力を植え付けて行くことが絶対に必要だと思ふ。そこでその爲には共同作業場の様なものを作つてやるか、或は各家庭で時間の餘裕を見てやるかといふことになる、出來れば共同作業場のやうなものを作つてやるが一番良いけれども、そこへ行かなければ各家庭でやる。然しこれもたゞ農村に於ける餘剩の時間を補填する爲にやるとか、或は多少の副業的利益を得させる爲にやるのだといふことになしに、初めから農村に工業を植え付けるのだ。努力は餘剩の時を使ふけれども、出來るものはさういふ副業品的なものでないのだといふことを初めから決めて掛る。農村の餘剩勞力を活用する爲には矢張り或る程度農村工業を機械化

させなければならぬ。例へば同じ工藝的な仕事をやるにしても本格的に機械的な工業を農村に植え付けるのは無論であるけれども、これは農村でやるのだから木製品を作るにしても鋸で切れば宜いのだといふのでなしに、小さい電氣のモーターでも置いて出来るだけさういふ荒削りの仕事を機械化してやる。あと本當に手先仕事の所だけを手先でやるのだといふ風に工業化して行かなければならぬと思ふ。そうしてその設備の如きは共同組合なり或は地方に於けるさういふことを専門にやつて居る組合が機械をつけてやつて行くといふやうなことで本格的に農村に工業を植え付けるのだ。今迄のやうに暇があつたら副業的にやらせるのだ、だから大して機械化する必要がないのだ、餘剩の暇でやつて行くのだといふのでなく、設備を與へなければならぬ。それには共同作業場を作つて農閑期の夕方なら夕方の三時間、村の共同作業場に行つてその工業に従事することが出來れば一番良いし、さうでない距離的にむつかしい所には、各農家に分擔させてやるといふことも良い。その方法は土地々々の事情、全國的に見れば、農閑期は繁期の色々な仕事の事情、二毛作の所、一毛作の所、色々あるから多く注ぎ込める所や、少ししか注ぎ込めない所とあるから土地々々に依つてやらなければいかぬが、さういふ風な組織的な農村工業としての植え付方を今から考へて手を打つて行かなければならぬと思ふ。

商工經濟會として今後やつて行かなければならぬ仕事も澤山あり又抱負や希望意見もいろいろあるが、兎も角商工經濟會としては今迄戦時中やらなかつた對外關係の仕事を極力やらなければならぬと思つてゐる。そこで日本商工經濟會に生産技術指導部―名前は多少變るかも知れない―といふ部を設けるつもりである。

將來の日本の産業の在り方はどうしても中小工業が中心になつて來る。そこで中小工業の一番の缺點は技術的レベルが擧がらず、良いものを作る技術が進歩しないといふことであるから、この指導部に於て全國的に技術指導をやらう。各單位經濟會に於ても業務部の中にさういふ人も置き、或は所に依つてはさういふ部も置かして地方の中小工業者の技術面の指導をやる。これは商工經濟會

だけの仕事としてするばかりでなく、大日本技術會、發明協會とも連繋を取り、政府の工業試験場とか工藝研究所といふやうなものとも協力してさういふ面に入れて見たい。地方的な工藝美術の面を考へて見ても、日本の工藝美術といふものは最近では餘程違つて居るかと思ふけれども、どちらかといへば名人藝のやうなもので、例へば福井縣なら福井縣には漆に就いて良い技術がある。或は大坂府なら大坂府にはまださういふ象嵌の技術がある。然しそれは門外不出の秘傳のやうなものであるが、さういふものを出来るだけ斡旋して新しい所に技術者を連れて行つて、三か月なら三か月講習でもやつて行くといふやうなことを少しやつて見たいと思つて居る。これは工藝美術ばかりでなく、機械工業とか化粧品工業とかいふ問題にも非常に必要だと思ふ。これは是非やりたいと思つて居る。

主として美術工藝品の輸出に就て

兒玉希望

戰爭中所謂七七禁令並に價格統制令に依つて、製造竝に販賣を禁止された本邦の美術工藝は、社團法人日本美術工藝會（舊美統）に依つて此が除外措置たる年額僅かに一千萬圓の數額の許可内に於て辛じて命脈を續けて來たのであるが、戰爭段階の進展と共に資材的にも非常な制壓を受け、正に絶滅の一步手前に至つたのであつた。

終戦と共にこれ等工藝の文化を以て世界の文化に貢獻し、之が生産擴充に依つて貿易或は賠償その他の資源に充當すべきものなることを痛感されつゝも資材的には依然この困難を緩和されず、又その資材も幾分軍需品の残されたものが現存すると雖も、或は地下にかくれ、或は各方面に偏在して、之が最も有効適切なる配分措置を講ぜらるゝに至つて居ない現状である、食料その他、國家

復興の重要物資輸入の代替品としても最も適當と見るべき之等工藝品の振興並に生産の擴大に積極的な意見又は措置に就て速かなる顯示を見ざることは甚だ遺憾であると思ふ。

非常に俗な云ひ方であるが、比較的資材を要すること少なくして然も價格の高い高級工藝品の世界的進出こそ最も望ましく、また之が發展に就て工夫すべきことの最も必要なる今日の如きは無いと信ぜられる。

之が爲には政府は、例へば商工省に工藝局の如きを設置して之が政治に當らしめる事もよからうし今後日本が進むべき道として科學又は文化を目標とするならば、文化にして然も大きな經濟的な役割を演ずる美術及工藝の如きものに對しては、文化院又は美術工藝院の如きものを作つて徹底的に之が百年の大計を建て、萬般の措置を講ぜらるべき必要があらうと思ふ。

前内閣時代に提唱された文化院設立の聲を聞いたけれども、夫れも勿論必要であるが、今日國家が最も困難して居るものは、經濟的事情であるから、之等文化と經濟の一石二鳥の役を演ずべき美術及工藝に就ては、従前の如く各省の一課に分散されることなく、統一的政治の行はれることを識者の間に提唱され、政府も之に就て一考を惜しまざることを望みたい。

目下はお土産品乃至は觀光物産としての工藝品の製作を希望され、遂次これが生産に着手されつゝあるが、斯した範圍に止まらず、廣く貿易その他の資源として大量生産される爲には、従來の輸出工藝品の生産並に貿易の状態を検討して官僚統制でなく、何等かの方法で、もし巧くゆけば自治統制に依つて、曾ての日本輸出工藝の一社一人の利益の爲に、安かろう悪かろうに墮ち、遂には輸出品と云へば粗悪品の代名詞になつて居り、日本製品と云へば、安くて悪い品だと云ふ常識を、世界人から持たれる様な愚を繰返したくない。

又従前は勞銀の低廉による價格の競争に依つて或る程度まで外國品に對し輸出額の地歩を占めて居つたものに對しても、敗戦日本の貿易狀況が戦前と同じ條件の下に置かれるとは考へられないから、此の點に就ても深く考へなければならぬし、且つまた外國に生産される商品と同様類似の商品に就ては彼地に

も失業等への考慮もあるから、之が輸入を許可されるかどうかは、甚だ疑問とされるが、之等に就ても、區々な意見や方法を以て失敗と混亂を重ね、再び信を世界に失ふことがあつたならば、國家として取り返へしのつかない結果を招来しなければならぬ。

指揮者も當局者も乃至美術及工藝の生産輸出を業とするものも、等しく深く此の點に留意して誤ちなきを期したい。

然らばどう云ふ製品を作つたら良いかと云ふ問題であるが、一言にして云えば、外地に於て使用又は鑑賞に堪へ得るもので、然も極めて日本的な特色を持つたものが良いと思ふ。それこそ前記の世界の平和に貢献すべき使者としての世界的進出と云ふことが出来る譯である。

生産規格に就ては、外國の指導者を患はずとも良い。又日本に於ける輸出の経験者の意見を聴くも良い。所謂衆智を蒐めて之に當らなければならぬ。

又日本の特色を失はないと同時に之を機械化する必要もある。手工業の爲に工藝としての良い天分を發揮し得ることは出来るが、餘りに小額の生産では前記の目的に添はない。尠くとも食料輸入の代替品として登場するには、相當の大量生産を計畫しなければならぬ。然し何處までも美術品であるから全部を機械的に造ることは不可である。たゞ原材料、素地等に就ての機械化である。又日本工藝に缺除して居ると見られる科學的研究に關しては大いに歩を進めなければならぬ必要がある。

之等の爲には最も規模の大きい且つ直ちに役に立つ、生きた指導機關を必要とする。勿論國家としても之が爲に相當額の資本を注入する必要があるが、出来れば民間事業にして、然も強力な政府の後援ある指導機關の設置を希望したい。また日本の眞の姿を知つて貰ふためには日本固有の文化を紹介しつゝ、美術及工藝品の進出を圖りたい。例へば七寶の花瓶の如きは、花を生けずに電燈の臺になつて居たり

する様なものである。美術工藝會の會員の製作するものに澤山の茶道具がある。茶が日本の固有文化であるとするならば、衛生的で文化的な茶料理や、お菓子

を作り、同時に清潔な新興茶室の建築をして、先ず國內に於て聯合國の人達に覺えて貰ふことも非常に面白い事だと思ふ。

斯様な所から出發して日本が、いたづらな好戰國でないと思ふことを知つて貰ふことは敗戦に喘ぐ日本國民にとつては、最も切實な願ひの一つとしなければならぬ。

それと今一つ必要なことは、製品並に價格に對する正義觀である。一見體裁が良くて、一寸使用すれば馬脚を現はす様な工藝品は、一品たりとも國外に出したくない、何處までも親切な製品であつて然も價格の正當なものでなければならぬ。

その爲には輸出工藝品の嚴密な檢定をなすべき機關を統制的でなく、眞の心ある人々の結合に依つて設けることも必要であらう。斯く論じれば美術工藝の振興に就ては問題は多々ある。速かに之が目的を達成すべき有力なる法途が講ぜられる事を望んで止まない。

工藝界への要望

伊原宇三郎

工藝に限らず美術全體の問題として、文化日本を新しく建設すると云ふ點から云ふと、私達の希望として一番眞先にやつて欲しい事は美術行政の機關を確立して貰ひ度ひことである。口では日本は美術國だとか、文化が何うのという聲は相當あつても、それでは政府が美術なり文化に對してどの程度力を入れて居るか云ふと、實に貧弱とも、見窄らしいとも云ひ様のない程度で、今迄美術は文部省、工藝は文部省と商工省に跨がつて居るが兩方ともほんの申譯程度の地位しか占めて居ない。

近い例だが、文部省の根本的な改革なるものを見ても、平和國家文化日本を

作ると大きな聲で云ひ乍ら依然として文化全體が社會教育局下の一課の地位しか與へられてないで、體育とか、教科書とかが、夫々局になつて居る。兎に角、一國の文化が體育の五、六分の一、従つて美術は約三十分の一位にしか扱はれないと云ふのでは、藝術の大きな發展も、文化日本の再建も覺えないと思ふ。恐らく商工省に於ける工藝の位置も同様軽く扱はれて居るに違ひない。

之は今の政府の首脳部が救ひ難い非文化人である何よりの證據であるが、又同時に永い間、美術の位置が社會的に曖昧であつた爲でもあるのであるから、我々美術家としては此の際、美術及工藝にもっと高い位置を占めさせる様に總ゆる點で努力しなければならぬ。

歐米のどの文化國を觀ても、日本人が想像出来ない位、美術や工藝を高く取り扱つて居る。フランスには美術省があるが、他の國でも最少限美術局、繪畫課、工藝課程度の行政機關は持つて居る。

何と云つても大きな仕事をする爲には、大きな機構や組織が必要であつて、其處で始めて作家の活躍も可能なのである。

今一つ當面の問題である美術及工藝と貿易の點からも大きな組織が欲しい。言葉を變へて云へば對内、對外兩面から痛切に其の必要が感じられる。

國內的に工藝を發達させる案は無數に考へられるし、各専門家から色々意見の出る事と思はれる。たゞ私の様な畫家の立場から素直に云ふと、日本の工藝は、所謂工藝的に過ぎて、どうも私達に身近な親しさが足りない。これは本當に工藝が解つて居ないのかも知れないが、私の経験では歐洲に居た時、私は工藝に非常に關心を持つて努めてそう云ふ展覽會を觀て廻つたが、自分が畫家で、これは工藝だと云ふ様な距離を全然感じないで、私達のやりたい仕事と全く同じ仕事を工藝もやつてゐる。且つなんとも親しいものが多いのである。

日本ではどういふものかそう云ふ誘惑を受ける事が稀で、なんとなく取り澄まして居る様な處がある。工藝と云ふ性質から云つても、もつと親愛な要素が澤山含まれて居て、我々の日常生活に完全に溶け込む様であつて欲しいと思ふ。これは他の美術に就ても云へる事であるが、結局實力の不足から來てゐるの

ではなからうか、私はパリで新しい工藝家團體のプリマヴェラの作家何人かと親しくして居たが、其の人達の平常の物凄い勉強振りに驚かされた事で、然も其の勉強が専門の工藝でなくて、もつと基本的な素描、油繪、彫刻で、むしろ其の方が専門かと思はれる位であつた。そう云ふ力を持つて居るから新しい形を創るにも、美しい色のハーモニーを作るにも、自分の藝術的な頭から生み出して居るので、新作毎に感心させられた事であつた。

日本では仕上げの技術等には随分優れた技術を持つて居る人も居るが、彫刻的な形とか、総合的な色彩になると、かなり類型的なものが多い。

又先年、獨逸あたりの影響で、陶器から模様を取り去る事が流行した時、模様が無くて微妙な色の工夫でどんなにでも親しいものが作れると思ふのに、どれもこれも冷たい眞白ばかりで、まるで病院みたいだなど、云ふ惡口の出た事もあつた。

これはほんの一例であるが、油繪方面でも其の實力の不足が、非常に痛感されて居るので、今度こそ全作家が協力して其の實力を養成し乍ら、新しく出發したいものだと思ふ。勿論その爲には相當な年月を必要とする事は云ふ迄もないが、それよりも今ずっと私が興味を感じてゐるのは工藝輸出の問題である。私はこれに非常に大きな期待と明るい將來を持つて居る。たゞそれには今迄の様な所謂輸出向のものではなくて、もつと高いものでなくてはならない。

私に其の自信を持たせたのに、斯う云ふ一つの経験がある。

戦争前、ジャワの總領事をしてゐた石澤豊君とは中學の級友で、一緒に繪も描いて居たし、親しい仲であるが、その二度目に總領事としてジャワへ赴くと、斯う云ふ相談を受けた。此の前に居た時に立派な官邸を新築して裝飾の爲に支那の壺だの、色々の工藝品をあらゆる買ひ集めたが、どうしてもオランダ側の高官連中の持つて居るものに敵はない。何か良い智恵は無からうかと云ふ事であつた。そこで私は、今あちらで買へる古美術や工藝品ではオランダ人に敵ひっこないのだから、是非現代日本の筋の通つたものを持つて行つて見給へ、恐らく彼等を感じさせる事が出来ると思ふと答えた。そこで取り敢えず一揃ひ

の工藝品を持って行き度いと云ふので、最初一萬圓位の豫算で私が委された。

然し私は工藝界には知人が少いので、學校關係の津田、高村、山崎三氏に然るべく幹旋を御願ひした所が、在外公館で我々のものを使つて呉れるのは之が始めてだといふので、大變乗り氣になつて呉れ、早速工藝界の有力者多數に通知を出し、作品を服部へ持ち寄る様に取り計つて呉れた。且目的が目的だからと云ふので價格も大分引いて呉れたりしたので、金額にして思いがけなく澤山、手に入れる事が出来、石澤君も大喜びであつた。私は各作家の略歴まで添へて日本の藝術を大いに誇示して呉れと頼んだことであつた。

暫くして石澤君から來た手紙で、私も驚いた事には、其の工藝品があらで非常なセンセーションを起し、有識者ですら日本にこんな藝術家が居るとは始めは信じられなかつたらしい。

ジャワには半官半民の藝術協會と云ふのがあつて、蘭印全土を大都市を中心として幾つかの地區に分け、夫々會館を持つて居て優れた展覽會、音樂會、劇等をチェーン式に巡回する組織になつて居たが、此の協會が是非この工藝品の巡回展をやらせて呉れと云ふ申込みがあり、石澤君も乗り氣になつて、更に豫算を追加して作品を買ひ足したり、参考品を借りたりして、やつと準備が整つた時、國際關係が段々危急を告げ、到々實現の運びに到らなかつた。

石澤君が歸つて來て、あの工藝品を持つて行つた爲に、どんなに自分が鼻を高くしたかといふ詳しい話を聞いて、日本からの筋の通つた立派なものさえ出せば、今迄の輸出向工藝品とは比較にならぬ廣い範圍が開拓出来るに違ひないと云ふ事を感じたことである。

既に歐米へ澤山行つて居る日本の工藝品が、何故あんなに見るのも恥づかしい様なものばかりなのか私にはどうしても解らない。

今迄がさうであるだけに開拓出来る處女地が全世界にあるとも云へるし、特に日本が日本独自の工藝品を持つて居ると云ふことは此際何より大きな強味である。

産業の國ではないフランスの輸出品の首位を占めて居るのが美術工藝品であ

ると云ふ事實は、産業を失つた今の日本に教へる處が多い。其處まで持つて行くには、どうしても相當な作家が職人の間に混つて良いものを創り上げる位の覺悟が無くてはならない。

今一つ考へられる事は、昔から日本にある工藝品の名作の模寫を多量生産すること、この方法だと僅かな指導だけで良い結果が得られる様にも思ふ。

話が又國內に還るが、工藝の展覽會がやはり商工省と文部省兩者に依り開催されて居る。商工省の方は無理なくやれてゐるが、文展では色々無理がある。

あの狭く暗い會場へ非常に種類の多い各種の工藝品を無理に陳べるよりは、いっそ工藝が文展から離れて、工藝自身或は建築などと握手した大展覽會を開く方が、一つは繪畫、彫刻の純美術に壁面を譲り、他方工藝は其の名譽と發達の爲に伸びくとした大展覽會を持つ事が出来れば一石二鳥だと思ふ。

フランスでは工藝美術のサロンが繪畫、彫刻のサロンと同じ位の規模で、毎年定期に開かれてゐる。一口に工藝と云つても、金工、漆工、圖案、染色、硝子、木竹工等、多種多様なものを含んで居るのであるから、其の各部門を旨く整理して作品を集めれば、どんな大きな展覽會でも開き得ると思ふ。

更に建築、それも設計圖だけでなく、實物大の模型、雛形と工藝とが渾然一體の陳列も考へられるし、更に之を推し廣めて、造園（庭園、公園、綠地帯、道路等）、家具、室内裝飾、版畫等迄含めた展覽會も充分想像出来る。

そして此の種の展覽會は、純美術の愛好者の様に、一部に偏する事なく、誰にとつても興味の深いものであるから必ず成功すると思ふし、美術を國民の日常生活に直結すると云ふ點では、純美術より遙かに工藝の方が手近であり、直接的であり、又それだけに重い責任もあると云える。

本當のもの — 美術工藝偶感

谷川 徹三

最近巷間に進駐軍の廉い土産品を販賣して居るがあの様な物に對して商工省あたりで、今少し指導して貰ひ度い。實に安っぽいものであの様なものを日本の美術工藝品だと思はれると如何にも恥しい氣がする。

前から「濱もの」と云つて、輸出向に作られた物があつたが、斯う云ふものをどうかしなければならぬと云ふことは、何十年來の識者の一致した考へであつたが、最近、進駐軍に賣られて居るのは之に輪を掛けたもので、いくら素材が無いからと云つて、あの儘で打つちやつて置く事は出来ぬものである。

「濱もの」と云ふものは、元來、日本のことをよく知らない漫遊者などが、頭で作り上げて居る日本に此方から調子を合せて作つたものなので、其の本質は最も薄手なエキゾチズムにあるのであるが、本來に日本人が、日本のものを、外國人が異國的和を感じる様に作らうと云ふのであるから、全く鵠的なるものである。

もと／＼江戸の末期から明治にかけて、彼等が日本的なものとして考へてゐるものは、主として遊里に於ける彼等の見聞から由來する處が多い。之は彼等のキモノに就ての觀念に最も短的に現はれてゐるが、キモノばかりでなく、家具調度類にしても、さう云ふ様な處がある。さう云ふペラ／＼を此際取り去つてしまはなければならぬ。

先日進駐軍の一將校が、何處かの美術展覽會を觀て、日本に對する今迄の考へ方を變へたと云ふが、良い物を與へれば、判る人には判るのである。美術工藝の問題は、判らない人には何處までも判らないので、そんなものは相手にしないで、何處までも本當のものを彼等に與へると云ふのでなければならぬ。本當のものを彼等に與へれば、直ぐには隨いて來られないでも、やがては隨いて來る。それが美術の力であつて、その美術の力に對する信頼を、我々は常に

持つて居なければならぬ。その信頼を持つて居ない者が、美術の事に携はるのは、携へること自體が間違つて居るのである。この根本問題をしっかりと擲んで居れば、爾餘の問題は自から解けると私は思つて居る。

商工省の立場は、美術工藝の問題にするにしても、かう云ふ立場とは離れ易い立場であることは私にも判る。又、今日美術工藝が、賠償の問題など、結びつけて考へられて居る爲に、出来るだけ彼等の喜ぶ物を作り度いと云ふ考になるのも、無理からぬ事である。然し、さう云ふ方向へ關心を向け出したらきりがない。

商工省が取り扱はふが、何處が取り扱はふが、美術工藝は何處までも美術工藝なのであつて、それは美しいと云ふ事と役に立つと云ふ事が、何處までも目安にならなければならぬ。美しいものは必ず役に立つし、その用に最も適するものは必ず美しい、と云ひ切る事は私には未だ出来ないが、我々の生活を健全にして行けば、自然に其の二つが合致する處に行く事を我々は信じて居る。

つまりこの問題は、美の問題や、用の問題ではなく、本質的には吾々の生活の問題であり、吾々の生活を正しく健全にして行く事が、問題解決の鍵であると思つて居る。さうすると美術工藝の問題から離れる事になるが、美術工藝の問題だけとして問題を見れば、何處迄も本當のものを作る事、これを目指すのが最初にして最後の問題だと云ふ事になる。さう云ふ良い作品と云ふものは、吾々の生活をも昂める力を持つて居るのであつて、そこへ來ると因と果とは相互に作用し合ふと云ふ事になる。

郷土工藝の復活に就て云へば、中央に對する地方の人達の、斯う云ふ問題に對する見解には二通りあつて、一つは何でも中央のものが有難いと云ふ考へ、一つは自分達の郷土のものを無暗に持上げる傾向である。是は矢張り住んで居る世界の狭さを現はす事で、何れも私は採らない。中央のものであらうと、地方のものであらうと、廣い世界を見渡して、良いものを良いとし、悪いものを悪いとすべきである。

是は日本とヨーロッパの關係に就いても云へる。曾つてヨーロッパを中央と

し日本を地方として、自ら貶しめる氣風があつた。又日本を世界の中央として、日本のものと云へば何でもよいとする氣風も戦時中一時興つた。是もさつきの場合と同じく私は何れも採らない。廣く世界を見渡して、それ／＼の國のものを、夫々の意味に於て認める。良いものがあれば之を學び、日本の物に就いても、廣く世界に對して恥しくない物と、恥しい物とをしっかりと見極める、さういふ感覺と見識とが必要である。

斯う云ふ事も最初に云つた第一義を體得すれば、自然に出來て來る事である。國際性と郷土性と云つた様な特別な問題は別にない。

工藝教育の問題と云つても、私はこの中心問題以外には興味が無い。此の第一義を體得して、古今東西の良い作品を出來るだけ澤山見せること、これが最もよい工藝教育である。(談)

工藝の郷土性

高村豊周

郷土性の問題は單に工藝のみではない。文學や演劇や音楽などに就いても以前から論議されてゐる所であるが、特に工藝は國民の日常生活と直結してゐる故に一層深く考へられなければならない。工藝が中央集權的に發達して來た理由は色々あるであらうが、今までの國家の經濟政策その他の行政がその方針で推し進められたが爲に、文化面の行政も無反省にそれに追隨して來た結果に外ならぬと言へる。特に明治末期以來の文展の構想が藝術至上主義であり、美術と國民の生活、美術の社會性といふ面に全く無關心であつた所へ、昭和初期に無條件に工藝が参加した爲に、工藝はその本質を省みるよりも寧ろ美術的なる様式を追ふに急となつて愈々都市中心主義に拍車をかける結果となつた事は否定するわけにいかない。その意味に於て、文展は美術の指導獎勵に常に功罪相半

ばして來たのである。

本來、郷土性の裏付のない工藝といふものはあり得ない。工藝はその土地特殊の資源を活用する事に依つて發生し發達した。これも、工藝ばかりでなく、例へば彫刻などでも支那では石佛が發達し日本では木彫佛が發達したのはその國の天然資源に左右された爲と言へるが、工藝ではそれば特に著しく、しかもその上に大名その他の權力者の行政上の手段方便の對象となつて十分なる保護獎勵を受けた。九谷、鍋島、有田などの焼物や南部の鐵器のやうなものはその典型的な例と言ふことが出来る。あらゆる工藝はさうした郷土といふ背景を持つて始めて存在の理由を明かにした。その用途、形態、文様等の凡てがその理由によつて各々の特色を形作り、その特色で庶民の生活に結びついた。

かうして各地それぞれの郷土的色彩を持つて發達して來た工藝であるから、其處に獨特の良さが生れ、その良さはお互ひに重複したり犯し合つたりしないで、常住不斷に庶民生活の中に美を惜し氣もなく與へた。これが工藝の本來の姿でなければならぬ。

然るに國家の美術行政の方針が劃一的に都市中心主義を執り、何等の抱負も理想もない官吏とそれに盲從する美術家の一群によつて無反省に引きづられて來て今日に及んだ爲に、各地の工藝は非常に近似性を帯びて來て美しい郷土性が希薄となり或る土地に於ては殆ど滅亡に近い状態にさへある。各地の工藝の代表的なものは凡て都市中心のであり、その他の大部分は單なる土産物に顛落してしまつてゐる。

或者は言ふかも知れない。工藝とても需要供給の原則に従つて發達する。工藝の需要者が都會が大部分であつて見れば、地方の工藝が都會化するのはやむを得ないのではないかと。けれどもこの考へ方は誤つてゐる。これは都會の消費者に工藝の美に就ての教養が足りないのが原因となつてゐる。工藝に就ての常識教育、一般の情操教育の低調は結局その國の文化の低さを示すものであつて、これに對しても我々は鋭意その向上を期さなければならぬ。盲目なる都會の消費者に向かつて地方の工藝が盲目なる追隨をする理由は決してない。此

の點ははつきりとした考へ方を持つてゐなければならぬ。

今、日本は新しく本來の姿に立ち戻つて、平和日本、文化國日本として再出發の途上にある。あらゆる面の仕事は例外なく再検討されて、素ッ裸から出直すべき機會にある此の時、工藝の郷土性の問題が工藝關係當事者に取り上げられる事は私の最も望ましく思ふ所である。

對外貿易の諸問題

石澤 豊

將來の對外貿易はなかなか難しい。結局はポツダム宣言の範圍内に於て許される譯であらうが、大體の見透しとしては當分は許可にはなるまいと思ふ。併し國民生活に不可缺である最小限度輸出が許されるとすれば結局、支那、南方向輸出の範圍であらう。他面に於ては賠償の爲に生産せらるべき製品の製造に必要な物資の輸入は許されるであらう。

支那及南方諸地域に於ける九億の生活必需品に就ても高級製品は日本から供給させるよりも、先ず米英から供給することになると思ふ。高級品の供給は彼等の手に占め、低級品、所謂雜貨品の場合にのみ始めて日本への原料輸入を許し、勞賃の低い日本に之を作らせる。それを支那、南方に向ける、そして競争にならぬ範圍で許した輸出に依り生じた利益の何%かを賠償にとると云ふ形式が想像され、重工業的の面は専ら米英の手によつて供給される。たゞ極く少量の特別な高級品、即ち一流の高級工藝品は輸出し得ると思ふ。併し高級工藝品に就て考へて見るに日本の販路と目される支那、南方に在住する米英人は、殆んど大部分が十年か二十年植民地で稼ぎ、金を握つたら餘生を本國に求める所謂「出稼ぎ型」である。斯様な購買層であるから、特別な高級品では、價格の點で餘り賣れないのではないかと考へられる。中級品ならまだ希望も持てる。

土着民は日本の高級工藝品を購買する資力など持つて居らない。

日本商品の輸入が現在止つた爲彼地では相當困つてゐる事は想像出来るが、今迄上海ものと對立して日本品は廉價な點で壓倒的に賣れて居た、今後もきつと中級品以下を日本から入れさせる事と思ふ。結局高級品を歐米から入れ蘭印その他から農産物、礦物資源を歐米へ入れさせ、下級品の供給は日本が受け持つことになる。安價で良質な品を出すことが日本の未來を開拓する唯一の方策であると考へる。

日本から輸出されていゝる安物雜貨に就て彼地で感じた事を記して見ると、先ず他國製品と比べて見掛けが同じであり價が安いから、直ぐ賣れるが、何處かしら手を抜いた缺點があるのが通例であり、使用者の身になつて考へぬ不親切な點が多いのである。この點を改めなければ爾後の發展は望めないと思ふ。

例を上げて述べるにインク瓶の蓋である。外觀は同じだが内側がザラ／＼の儘であつて机上で覆へると直ぐにインクが流れ出て非常に工合が悪い。一寸手を加へて滑らかにして覆つてもインクがこぼれ出ぬだけのことがしてない。又、肉叩き―カツやテキを作る時に肉を叩き伸して柔らかにするもの―でも實に奇麗に出来てゐる、然し使用して見ると切り込みが淺くて工合が悪い。シャツのボタン等にしても直ぐに取れてしまふ、萬事この調子であつて、今後此の點を改めぬ限り他國品との競争は望めないと思ふ。

デザインの問題も陶器の高級品は歐米に依つて占められてゐて、中、低級品は壓倒的に日本で占めてゐる。南方から生産資源を日本に供給し日本からは低級品を南方に輸出させ高級製品は歐米の手で供給される事と思はれる。

國外の大多數は日本の良いものに就いては殆んど未知である。曾てジャワ在任當時木彫、漆器、ガラス製品(文展に出品されてゐる程度のもの)、瀬戸物(コペンハーゲン式のもの)、刺繡等の優秀品を在バタビア總領事館の食堂、客間に飾つて、一般の注意を喚起した事があつた。

染物の専門家で野口眞造君が試みられた染物に刺繡を綜合して効果を出したものなど非常な興味を持つて迎へられた、そして彼地の藝術協會の懇請に依つ

て、バタビア、スラバヤ、スマラン等巡回して一般に展覽し度いから、貸輿願ひ度いという話があり進行したが、その内戦争となり結果を見る迄には到らなかった。

ジャワ更紗は二種に分ける事が出来る。一は工場に依る捺染の型、一は中部ジャワに主に發達した家庭の手工藝で、一枚を仕上げるのに三年、四年、十年とかゝる仲々良いものである。天氣のよい日に老婆などが刻明に蠟描きをして作つてゐる。全然算盤を度外視したものである。

布帛類も日本からの輸出が止つて困つてゐると云ふのが偽らざる現状であらうと考へる。

對米輸出は矢張り生糸が一番であり、次は茶であらう。私の滞米當時は、十錢ストアー等で見掛ける程度の安物陶器が盛んに出廻つてゐたが漆器は餘り見掛けなかつた。

米國に對しての普通の工藝品の輸出は餘り期待出来ない、非常に高級品ならば又別である。所謂骨董品に屬する近代一流處の作品程度のものなら現在の爲替相場から云つても相當賣れると考へる。

將來日本の店を彼地に持ち得るや否やは未だ不明であるが、輸出に當つては從來彼地の習慣其の他の研究が不足であつたと思ふ、製品の検査は役所委せのみでは駄目である。是非共製作者側の自覺が必要である。幹部や重役だけが彼地へ行つて視察するのみの今迄の遣り方ではなく、直接製作に當る職人にも充分そう云ふ機會を與へ、彼地の全般的狀況を知悉させ、向ふの技術者も招聘して製作にかゝつてこそ始めて成功すると思ふ。これは彼地で生活し日本品を使つて見ると何處か間の抜けた處がある事が判るのであつて、彼地の優秀な人を招聘し日本の家庭を見せる等、所謂技術の交流が必要なことを痛感する次第である。

排日問題の喧しい頃は輸入制限が行はれた事もあつたが日本として反省すべき點は、先方が獨立國だと云ふ事を忘れた如く良い安い品を賣つてやるのに輸入制限など行ふのは怪しからんむしろ感謝すべきである。そつちが悪く出るな

らばこつちで品物の供給を止めるぞなど、云ふ態度で臨んでゐたのは業者、政府ともに同じであつて、私とその非をさとしても無反省であつた。彼地の商人は皆次の様に云つて居る。日本の業者とは安心して取引が出来ぬ。實際判らぬ。何月何日、までにこれ／＼の品物をと契約しても、突然賣り止め等が飛び出すので非常に迷惑すると。

斯様な點から彼等は日本品と遠のく不便を忍んでも、自給を計畫したり、他國製品に頼ろうとする。この様な氣運を醸成したのは日本の責任であると思ふ。

未だ國際情勢が混沌として列國の帰趨が判然せぬ現在、今後の貿易が如何に變化するかは未だ結論し得ない。日本の現状は未だ一種の軍政施行時代とも云へるし、各國が戦後共通の國內難問題を如何に解決するか、又世界各國家間の萬般の問題が如何に處理されるかに依つて、世界貿易引いては我國の對外貿易の動向も定まつて行くであらう。特にソ聯今後の對東洋通商政策の動向と米國のそれとの關係が如何に進展するかに依つて日本の輸出入貿易も規制されることと思ふ。この動向を注視する事が我國今後の輸出問題を善處する爲に一番必要な事であると考へられる。

創造力の源泉について

宮本百合子

その國獨特の工藝美術に就ての意見は、その國の人々が、自身の國をどう云ふ角度から新たに認識して行くかと云ふ段階に應じて、いくらかづゝ變化をしてゐる様に思はれます。

大體日本と云ふ處は、ヨーロッパ諸國に對して常に意識して自分の特殊性を主張して來ました。

精神上の問題としては、日本人自身にさへ、現實的には内容のはつきりとし

ない日本魂と云ふものを輸出文化の中心において来た様に、全文化面がしつくりした郷土性に安定して成長して来たこと云ふよりも、常に外部の影響に反應して然も、神經過敏にそれを意識しつゝ動いて来たと見られます。

昔山本鼎さんが信州で土俗民間工藝の美術的成長の爲に努力されたこと、又柳宗悦氏が立派な民藝館を持つてゐて、民間工藝の價値を理解させ様として居られる努力等も、歴史の貧しい日本の郷土工藝の上では注目さるべき事とせう。

然し公平に見て、夫等は趣味的な要素が多分にあるし、一方ブルーノ・タウト等が來朝して、地方の經濟生活と結びついた特殊性を透して、郷土工藝の指導をした場合にしても、タウトが去つた後、それが何處まで伸びて、土地の人々の生活の實力となつてゐるかに就いては、餘り聞いて居ません。

日本の郷土工藝の特色は、これまでの日本の社會の歴史とともに、一方全く封建的で、各地方の郷土工藝の發展と云ふ方策は採られず、他方ではどしどし近代工業に摩滅させられて、タツプリと、豊かに、其の土地に芽生えて育ち、大成した工藝の姿は見られないのでせうか。織物、陶器、漆器、木工、染色などは、昔は郷土工藝の生産物であつたものが、明治以來、急速に近代企業の中に吸収されました。そして忽ち商品化してしまつた揚句、今度の戦争ですっかり窒息させられて、其の特殊技術さへ抹殺されて仕舞ふか、或は極端に軍事的方面に利用されました。

日本工藝の全般に亘る低下と、貧困化を今日どう云ふ風に再建するかと云ふことは、基本的には日本の全生産の機構、その融通、より健全な發展をどう導いて行くかと云ふ重大な課題の中に含まれてゐるでせう。

賠償の問題と聯關し、又、進駐軍の土産品の餘りにも低級なるを我ながら氣まり悪く思ふ心持と結び合つて、工藝美術の問題も注目に上つて居ると思ひますが、今日のその現象は、原因が遠く且深い處にあるのですから、皮相の解決で折り合ふ問題ではないでせう。

掘り下げて云へば、日本の工藝美術品が賠償の對象として考へられなければならぬと云ふ其の事實が、とりもなほさず原因となつて、賠償品としても、

土産物としても自信を持ち得ない日本工藝の衰微を齎らして居るのです。

先進諸外國の間に肩を並べて、爪先き立つて無理な資本主義的な競争をして来た日本は、文化面にも實におちつきがありませんでした。

百年かゝるものを十年で、若しかしたら一年で半年で間に合はせ様として来た、よくない習慣があります。

この數年、不條理な戰爭目的の爲に、この回轉度数は益々速くされて、一人の生涯さへ、僅か十六、七歳で終熄させることを、恐怖すべき事としなかつたほど、非人間的状態に置かれました。

人間そのものに加へられたこの様な非道な力が、工藝美術をどうして生かして置いたでせう。手荒く取り扱はれ其に抗する力と方法を知らなかつた人間の心の創造能力をとりもどす爲には、たゞ外部の強壓が取り除かれたと云ふだけでは駄目です。やうく自分の足で兎も角く歩けると云ふ事になつた民衆一般が、自身の努力で生活運營の方法を組立て、其の收支を自身の勤勉と知識に依つて責任を持ち、現在日本の全般に見られる混亂と破壊が、再編成されて行く過程で、始めて眞の日本人の生活から生み出された、愛情の籠つた、面白い郷土工藝と工藝とが生れる筈です。

子供が、何故、美しいか。何故愛くるしいか。それは子供が自分の愛くるしさや、無限の發展の可能や、生命の伸びやかさを、ちよつとも意識しないで、成長そのものゝ裡にあり、發展そのものゝ中に没頭して刻々を生きて居るからです。

支那の民衆生活は、想像以上の野蕃と生命の浪費とに充滿して居ます。總べての外國人は此の點に驚き撃たれますが、結論としては同じ東洋人である日本人も、ヨーロッパ人も、等しく云ふ處は「究極の於て支那民族は偉大である」との結論です。

之はどういふところから來てゐるのでせう。外國人の紀行を讀むと日本人の清潔さ、律儀さ、禮儀深さと云ふ型式の完成に於ては言及するけれども、どうも中國人の生活に感じる様な、偽らざる生活力の現はれに共鳴すると云ふ點は

缺けて居ます。中国の人は、何う見られると云ふ様な意識で患らはされて居ないと思ひます。日本人は後進國家としての出發、明治の始めから今日まで、斷へざる一つの憑きものがありました。夫は「外國からどう見られるか」と云ふことでした。その心理が日本人を色々な不自然に置きました。例へば、工藝美術に就いても、自分達で其を創ることを欣び楽しんで、それを人にも見て貰ふと云ふ素直な眞情からされるのと云へない場合が少くありません。觀光事業一つを採つても、世界で特徴のある日本の自然を皆が楽しむ様にと云ふ晴やかな開放性に立つては居ないで、何時も貧弱な一般經濟の小遣ひ稼ぎ、或は國際的阿諛の心理を伴つて計畫されてゐます。この事實は心ある日本の人々に何時も苦々しい苦痛を與へてゐる處です。

日本人達はこの大きな世界轉換の時期に當つて、國際諸關係の中に於ける日本及日本人といふものを現實的に世界水準に於て摺み直さなければなりません。

民族の創造力の發展の一課題として、目前の淺薄な功利主義に足をとられることなく工藝や美術の發達も考へられるべきであると信じます。

編輯後記

戦後の日本工藝は如何なる道を歩むべきか、賠償として許さるべきわが工藝産業は多くの問題を包蔵してゐる様に思はれる。

これらの點に就て夫々の分野に於て夫々の立場から忌憚のない意見を徹してこの小冊子を大方の参考に供することとした。

戦前に於ける輸出工藝と今後のそれとは外部的にも内部的にも一變するであらうし又そうあらねばならぬこと、思ふがこの戦後の起ちあがりの第一歩とし

て海外へ向けられるべき工藝品を考究し検討する根本的態度を先づしっかりと把握してかゝる必要があらう。

過去を反省し、現在を直視し、將來を考へることが大切ではあるまいか。

日々の新聞、ラジオの報道でも知られる様に昨年の情勢は實にテンポが早く既にこのパンフレットが發刊され様とする今日この頃では工藝品の輸出もほゞ見透しがつき業界は活潑に動きかけ様としてゐる。

これらの資料も目下蒐集整理中であり關係當局、業界と協力して遂次刊行する豫定であるが、如上の意味に於て讀者諸氏は本文執筆者の眞意を汲み取り執るべきを執つて新日本再建の爲に大いに努力活躍せられんことを切望する。

(松田記)

工藝指導所パンフレット

戦後の日本工藝 非賣品

昭和二十年十一月二十八日印刷

昭和二十年十二月 十日 發行

編輯 商工省工藝指導所

東京都杉並區

久我山二丁目七一〇

岩崎通信機株式會社内

印刷所 新日本印刷株式會社

東京都板橋區

練馬南町一ノ三五三二